未来へ残そう 美ら島 美ら海
OCCN結成

クリーンコースト大作戦 9月中旬に県内一斉実施

10月には大型巡視船の記念クルージングも

沖縄クリーンコーストネットワーク（OCCN）が七月二十三日結成され、未来へ残そう 美ら島 美ら海 の合言葉実現へ一歩を踏み出した。

OCCNは沖縄県内外での環境保全活動を官民一体で推進しようと、海洋環境保全組織とボランティア団体大集合を目指し十一管本部の提唱で進められた。

十一管本部で環境省沖縄奄美自然保護事務所、沖縄県自然保護課、沖縄県、地方自治体や関係一〇五団体・機関などの参加が呼びかけられた。事務局は十一管本部が担当。

結成総会は午後二時から、メンバー約一五〇人が出席して沖縄県庁講堂で開かれた。結成までの経緯、ネットワーク活動の基本的ルール（申し合わせ事項）を協議の後、「OCCN元年の活動として九月七、十五の両日に「美ら海・美ら島県内一斉クリーンコースト大作戦」、十月上旬に生物調査」の記念講演会）の田中幸雄理事長がOCCNへの期待を述べた。

総会終了後、国営沖縄記念公園水族館の内田淳一館長が「沖縄における大海洋調査」、沖縄近海絶滅の生態系なについての話に、メンバーは、海洋環境保全の重要性を再確認していた。

九月の県内一斉クリーンコースト大作戦には、二万人を目標に、県内に広く参加を呼びかけていく。（十一管）

OCCNの結成総会

門司分校「みうら」乗船実習

海保校門司分校では、海上保安官になりたいと願う、機関、飛行、整備（航空）の各状を持った二五人が研修生として寝食をともにし、研修・訓練に打ちこんでいる。待ち望んでいた練習船「みうら」による乗船実習が六月十九日から八日間行われた。

乗船実習を通じ、いま海上保安庁に求められている各部課の職員を取り払った総力と団結心が育成されているようだ。進捗は速いものの、同期としてのきずな、仲間意識も育ってきた。整備（航空）研修生の感想文を紹介する。（門司分校）

海上保安官として生きていくための原点に

門司分校初研46期整備・藤原　基洋

はハ日間は短いと感じた。「みうら」での乗船実習の経験は、非常に有意義であった。初めて乗る巡視船、巨大なエンジンや数多くの機器類、何とかも分からない。

次回この引き継ぎを終え、「別れ！」の号令を掛け、学校で取得した基本的知識を実践的なものにするように、航海ッチチ緊張の連続である。時間の経つのが、とても速く感じられた。

突然、体が大きく回転する。異様な感覚を覚えた。これが船酔いというものか。これ出たくない思いわれる。特に、航海ワッチで「みうら」の巨体を操ったとき、つまった実際と興奮は二転され、「人間には順応性があり、すぐ慣れる」と心配するな。同期の言葉に励まされ、その言葉通り船酔いを克服し、実習を終えることができた。

短い実習期間に船内生活に慣れ、体力も、食欲さえも容赦なく奪っていく。

吐き気に堪えるのが精いっぱいで、吐露な操作や船員運航などと数多くのことを学べた。しかし、それ以前にもっと大切なことを学ぶことができた。どんな困難でもとても諦めず努力することである。それを乗船が支えてくれたことが何よりもありがたかった。

困難を乗り越えられる強靭な体力・体力はもちろん、仲間を思いやる気持ちの大切さを身をもって学んだ。このことは、船に限らず海上保安業務などに通じていくものと、今は信じることができる。

雨日中、自転車走行、舗装の雪面反射熱でのランニングに、車の速度を緩め窓から顔を出して「がんばっていくんだよ」と声援したり、行事として始まった。今年は有志によって行われたが、これで北海道沿岸一周一管本部創設五の周年記念を実施した。（釧路）

海難防止・海洋環境保全キャラバン海の日ゴール

オホーツク沿岸315キロ走破

七月十五日、日本最北端の宗谷岬をスタートした「海難防止・海洋環境保全キャラバン2002」が、海の日ゴールした。管轄内の職員有志三人（延べ四人）がマラソン、自転車、カヤックでライフジャケットをつけず、オホーツク海沿岸約二百五十キロを走破。途中、沿岸の漁船、水難救難所などに立ち寄り、救命衣着用の促進、青い羽根募金、海洋環境保全を訴えた。

ゴールの網走港第3ふ頭岸壁では、巡視船「ゆうば」に検査航海の乗船者が待つ中、握手の釧路保安部長、警救課・中瀬一雄専門官（48）が午前一時半、「ゆうばり」乗組員手作りゴールテープを切った。

雨天の中、自転車走行、舗装の雪面反射熱でのランニングに、車の速度を緩め窓から顔を出して「がんばっていくんだよ」と声援したり、仕事の合間を休めて手を振ってくれる人もいた。

キャラバンは昨年に続いて二回目。

「海の日」にゴールインした仲間を受ける中瀬さん

知床岬灯台へ発動発電機用の燃料を運搬

知床岬灯台は発動発電機用の燃料運搬が七月八日行われた。

知床岬灯台は電力供給がないため、三台の発動発電機を二日交代で運転している。このため、燃料の軽油を年に一回、海上が船型七月に運んでいる。

三・八キロの燃料を、二人のガソリンスタンド従業員が二人一組になり、ドラム缶を専用船着場から船料車までの約一〇〇メートルを、ゆるやかな上り坂を運んだ。（写真）

この光景は電源がソーラーシステムに代替されるまで毎年続く。（網走航標）

被弾「あまみ」の船橋前面展示全国行脚始まる

昨年十二月の不審船事件で全国一〇カ所で展示される。

「あまみ」被弾個所に見入る人たち（小樽）

で被弾した巡視船「あまみ」である。五月七日から十七日まで東京の国土交通省霞ロビーで展示され七、六四八人が見学した。海上保安業務を国民に広く理解してもらおうと、各地で展示することになった。

不審船事件では、巡視船の威嚇射撃に対し、不審船から反撃があり、巡視船三人が負傷した。修理時に切断した前部部分を横開き式のトラックで搬出する。

小樽では、港湾合同庁舎北側駐車場で公開。二日間で約千五百人が見学。見た人たちは「すごい！」「海上保安官はこんな危険なところで仕事しているんですね」などと話していた。

今月の新刊　知の冒険への新書、
PHP BOOKS　インテリジェンス、
日本は国境を守れるか
小川和久
本体667円
不審船、密航、麻薬、海賊……海洋国家・日本が直面する脅威と「国境警備隊」としての海上保安庁の決断。
青春出版社
〒162-0056東京都新宿区若松町12-1
☎03(3203)5121　FAX03(3207)0982